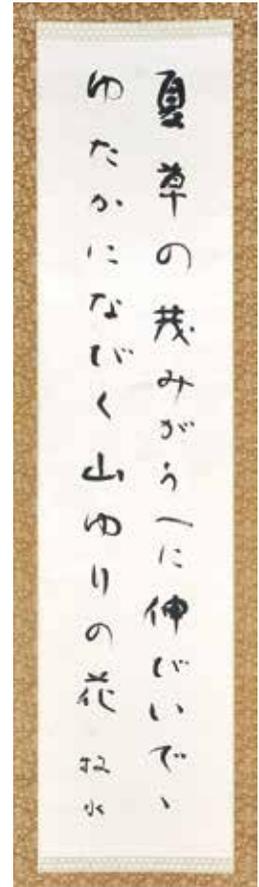


沼津市若山牧水記念館

第65号 令和2年9月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



夏草の茂みがうへに伸びいでて ゆたかになびく山ゆりの花 牧水

牧水の直筆で半折に書かれたこの短歌は、第十歌集『白梅集』（妻・喜志子との合著、大正六年八月刊）に収められた「山百合」と題する五首のうちの一詩で、『白梅集』には、夏草の茂りの上にはあらはれて風になびける山百合の花

となつてゐる。他の四首は次のとおりである。

夏山の風のさびしさ百合の花さがしてのぼる前にうしろに

折りとればわれより高き山百合の青葉がくれの大白薔おほしろばら

たわたわに薔ばかりが垂れるつつこの山百合の長し真青し

山百合の花のひとたばさげ持ちて都へのぼる友に逢はむため

大正四年牧水は、腸結核になつた喜志子の転地療養を医師から勧められて、三月十九日に神奈川県三浦郡北下浦村へ転地した。喜志子は転地してのんびりとした生活

に入り、落ち着いていった。一方、牧水は積年の疲れが出たのか、ほんやりしてしまい、散歩や昼寝ぐらいで仕事らしい仕事にほとんど手が付かなかつたようだが、十一月には長女が生まれ、「みさき」と命名した。

翌大正五年、牧水は二月二十六日に上京して三月十三日まで東京に滞

在し、十四日から宮城、岩手、青森、秋田、福島と東北各県を旅行して五月一日に帰つてきた。二ヶ月余り留守をしたが、六月五日に散文集『旅とふる郷』、同月二十二日には第九歌集『朝の歌』、十一月には自選歌集『若山牧水集』をそれぞれ出版している。

ところで、牧水は『創作』を大正三年十二月号で休刊し、大正四年七月、太田水穂が創刊した『潮音』に参加して『潮音』の編集経営を水穂から引き受ける相談がまとまつた。しかし、太田水穂との間に意見の相違が出て、大正五年『創作』を復活する決心を固め、十二月二十八日に一家で東京へ引き上げた。北下浦での二年にも満たない生活ではあつたが、三浦半島の自然を生き生きと詠っている。掲出の短歌について、牧水の高弟・大悟法利雄は、その著『鑑賞 若山牧水の秀歌』に次のように解説している。

三浦半島の山や岡には実に山百合が多い。その花の季節になると、青草の中に白々と群がり咲いていて、遠くから見ると何かの白い紙でも撒きちらしたよう、オヤ何だろうと驚くようなことがあるが、近づいてみると、白いみずみずしい百合の花が押しあうようにかたまつて咲いている。こんな茎によくもまあとと思うほど大きな花で、野の花とは思えないくらいに豊かである。

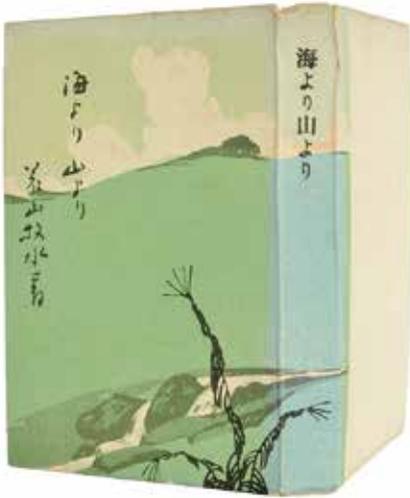
牧水の津軽——大正五年の青森行 梶原 さい子

牧水は、生涯に二度津軽を訪れており、一度目は、大正五年の三月～四月、三十一歳の時である。その様子は、短歌とともに、紀行文『海より山より』からも窺えるが、このあたりのくだりがめつぼう面白い。

牧水はこの旅について、

今までの僕の旅は多く行く先々の山川風土に親しむ事であつたが、今度は全く異つてゐる。
『海より山より』の「板留より」

と述べている。どう「異つてゐる」のか。



種々な人に會つた。海の底の巖かげに動いてる貝の様な人、日あたりに咲いた雪白な桃の花のやうな人、平家蟹の甲羅の裡に鶺鴒のやうな心を宿してゐる人、海鼠のやうな人、二十日鼠のやうな人、自身の運命の、自身の生命の次第に自分から逃れて行きつゝあるのをじつと眺めてゐるやうな人、活動寫眞の悲劇から抜け出して來て雪の中に酔ひ倒れてゐる様な人、鼻の下の短くないらしい人、何にも知らない人、總てを知り悉してゐる様な人、漸く自分の生活の味を噛み出して來たらしい人、その他、あれこれ。
『海より山より』の「板留より」

何という生き生きとした比喩だろう。これを書いた時、牧水の脳裏には、そのモデルたる一人一人の顔が浮かんでゐた。そう、青森行は、「山川風土」にはではない、人に親しむ旅だったのだ。

牧水は言う。

僕は今まで曾つてこれほど自然な人々の仲間入をした事がない。僕は今度人間といふものゝ難有さ（ありだ）をしみじみと痛感した。イヤ、斯ういふ風に言ふと、僕の眞實の心

持とは何だか少し離れてものを言つてゐる様だ。要するに僕は唯だ嬉しかつた。

『海より山より』の「板留より」

率直に青森の人々との交わりを喜んでゐる。

牧水をこう思わせたのは、人生の様々な段階を経て牧水自身の人生が、また、「人間といふもの」への認識が、深まりつつあつたことがあるだろう。あるいは、南国生まれの牧水とは全く違ふ風土に暮らす人々と触れ合うゆえの興味と気安さもあつただろう。いや、何より、この旅で出会つた人達の魅力に尽きようか。

牧水がこの旅で一番会いたかつたのは、加藤東籬である。

これより訪ねむとする友は聞えし沈黙の人なり
もの云はぬ加藤東籬を見ればやとてはるばる
急ぐ雪路なるかも
『朝の歌』

加藤東籬は牧水の八歳年上。生地である北津軽郡松島村（現・五所川原市）で家業の農業に携わりながら、牧水の「創作」に参加していた。

牧水と東籬の関わりは、東籬が牧水の元へ歌を寄せたことに始まる。それは、この青森行の五年前、明治四十四年のことである。牧水のところには、毎月、何百通という多くの投稿があつたが、その中で東籬の原稿はひととき目立っていた。牧水はそれを「驚くべき異色を持つたもの」（『批評と添削』）と表現している。

牧水は昂奮し、誌面の最上級の位置に東籬の

歌を置いた。

それでは、その「異色」とは、どういうものであったか。

牧水は、東籬の歌について、澄み動く心の流れがあること、真つ正直であること、同時に、寂しいものごしがあることを言っている。また、東籬の心が津軽の自然に宿り、優れた叙景詩となること。そして、「彼の作る紋景の歌にはみなその底に人間の匂ひがしてをる」(批評と添削)ことを述べている。

常盤木の中の木立の褐色にしみんとゆくとゆく

冬の心よ

『加藤東籬全歌集』

枯草の丘より低く日のわたる林の家の生活なまはら

を思ふ

『加藤東籬全歌集』

かすかにも市のどよめき聞えくる香取の宮の春の樹に凭るよ

加藤東籬『加藤東籬集』

東籬が牧水に初めて歌を送った頃のものを見た。なるほど、「常盤木」の歌は、冬の心を詠みながら、まさしく人間である作者の心を詠んでいる。「枯草」の歌では、冬の景色の中にこの地で暮らす人間の営みが、より直接的に意識されている。「かすかにも」の歌は、春の宮を描きながら、「ここにはいないたくさんの人々の存在を、ありありと感じさせている。

牧水が言うところの「底に人間の匂ひがしてをる」風景。この「人間」とは、東籬であり、その身めぐりに生きる人達である。牧水が青森を訪れ、その風土の中に「人間」を見たのには、

東籬の歌を読み続けていた影響もあるのかもしれない。

さて、牧水と東籬は、誌上や手紙の上で交流を続けていたが、これまで実際に会ったことはなかった。その初めての出会いほどのようなのだったか。

加藤東籬君、永い間の交際で今日初めて逢ふ筈の未見の友、その家に飼はれたこの馬よ、希くばその主人が爲に遠來の客を跳ね飛ばす事勿れ、『海より山より』の「津軽野」

馬? 跳ね飛ばす事勿れ? そのお願いの唐突さと大仰さとに戸惑うが、実は、牧水はこの日、生まれて初めて馬に乗ったのだった。誰かに引いてもらうのではない。一人で、雪上を、それなりの速さで、二時間余り、である。これは、東籬が駅から自宅までの道のりのためにと用意してくれた馬だったが、前後を騎乗の心得のある人達が駆けてくれるとはいえ、どんな気持ちだったか。「此場に及んで既う弱音も吹けなかつた」というのがその実だが、同時に、「子供らしい面白味も感じ」、「今飲んだ酒の酔も手傳つて」というところもあつた。好奇心と「酒」が牧水を動かしている。

それで、東籬と会った瞬間については、路傍から馬上へと帽子を振る東籬を見て、

私の胸は踊つた。手紙の上だけではあつたが互に勵まし勵まされて來た永い間の尊い

友人、その人といま初めて相見るのである。なるほど、寫真で見覺えた加藤君であつた。私は唯だ帽子を取つて頭を深く下げたのみ、何にも言ふ事が出来なかつた。彼もまたさうであつた

『津軽野』

と牧水の筆にはある。が、この場面を、牧水の後に馬を走らせていた林柁次郎に言わせると、

牧水はその時きつと、馬を止めて、お互い挨拶を交わしたかつたらしいのですが、毛内君の馬の後ろをトットツとついでいく青毛のこと、ただ「アツ、アツ」と言つただけで四人の前を通り過ぎてしまつたんです。

十川秀雄『雪しろき梵珠の山の』

となる。このいささかの筆致の違いが楽しいが、初騎乗にしてもつともであるう。青毛の馬とは、今のサラブレッド等とも異なる、体高が低めの在来種系統のものだったろうか。そうイメージすると余計に、大切なこの出会いの場面が微笑ましく感じられてくる。

そして、夜。宿での酒宴となつた。「雨のやうな盃」が出る。哀愁を帯びた津軽の「唄」が出る。たけなわ、東籬が突如声をあげた。

彼生れて四十年の間、たゞの一度も唄つた事のない人であつた相だ。加藤さんが唄つた、加藤さんが唄つたと満座の若い人達は一齊に立上つて手を拍ち足を踏みならした。

ドダバ、エコノテデー、アメフリナカニ、カサコカブラネデ、ケラコモキネーデ。

彼は瘦軀をゆすりながら眼を瞑ちて繰返し
くこの唄を唄つて居る。 『津軽野』

津軽の風土に塗り込められてきた東籬の含羞の深さと、そこに風穴を開けた牧水の存在の貴重さに胸を打たれる。牧水は折口信夫言うところのまればとであり、来臨し、確かに、この津軽の男を揺さぶった。共同体の中からは打ち破れなかつたものを、牧水は闘いた。稀有な奇跡の一夜なのである。

唄われているのは、「どだればち」とも呼ばれる津軽甚句。

ドダバ、エコノテデー、アメフリナカニ、カサコカブラネデ、ケラコモキネーデ。

どうしたの、この家のお父さんは。雨降る中、笠もかぶらないで、蓑も着ないで。

牧水はこの夜のこう詠った。

泣く如く加藤東籬が唄うたふその顔をひと
目見せましものを 『津軽野』

「泣く如く」——どだればち、ホーイホイと合いの手の入る、明るい盆踊歌だが、これを「泣く如く」と感じさせた、感じた、心の共振を思うと胸が詰まる。

さて、誰に「見せまし」なのか。
それは、和田山籬。東籬の幼なじみであり、

歌を熱心に作りあつた同志にして、今は、上京して牧水と懇意にしている人。どのくらい懇意かというのと、「山籬のバカ野郎 喧嘩がしたくば出て来い」(大正四年六月十三日)、こんな手紙を出せるほどである。

つまり、牧水はこの時、東籬という友に会いつつ、山籬という友のふるさとを訪ねていることになる。「泣く如く」の歌は、東籬を思いながら、在京の山籬へ送るための即詠だった。

翌日、牧水達は山籬の実家を訪ねた。ここには山籬の親達がいる。ここでの出会いも実に楽しい。

オー、と叫びながら阿父さんは飛んで出ていきなり私の手を取られた。そしてそのまま、座敷へ連れて、いや寧ろ引きずられて行つた。(中略)

阿父さん先づつぶれ、次いで次ぎくに倒れて床に入つた。眼がさめて考へると、私は三度も五度も阿父さんの荒鬚のその口で接吻せられたやうだ。 『津軽野』

まったく、興味深い人達ばかりである。

汝が父はさきくぞおはす汝が母はさきくぞおはす汝がふるさとに 『津軽野』

無論、「汝」とは山籬のことである。あなたの父母はお元気にいらつしやるよ。自分のいない自分のふるさとからのメッセージは、山籬に不思議な喜びをもたらしたに違いない。

牧水にとつての津軽は、大切な友二人のふるさとであり、人間というもののへの魅力に気づく貴重な場所だった。どたばた顛末記ともいふべき楽しいその筆致を追うとき、牧水の生涯に、この津軽の旅があつたことをつくづく良かったと思うのである。それは、友二人にとつても同様である。

都には牧水とよぶ男住みやまとうた詠むし
たはしきかな 加藤東籬『加藤東籬集』

君に逢はでしづころなし手をとらばまし
らのごとく酔ふてあるべき

和田山籬『落日』

「筆者プロフィール」 かしわら さいこ



昭和四十六年
宮城県気仙沼
市生れ。宮城
県大崎市在住。
高等学校教員。
塔短歌会編集
委員、朝日新
聞みちのく歌

壇選者。平成二十三年、第二十九回現代短歌評論賞。平成二十七年、第三歌集『リアス／樺』で第十一回葛原妙子賞を受賞。歌集に『さらめ』『あふむけ』『ナラティブ』がある。本年八月に開催した第三十二回『籬の歌会』の講師。